広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

伝統の薩摩ボタン 日常に使う喜びを

室田 志保　鹿児島県／薩摩ボタン絵付師

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家〈東京大学教授〉）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト〈アート・プロデューサー〉）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。鹿児島県選出の匠、薩摩ボタン絵付師・室田志保さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

1月18日、プレゼンテーションにて

エリア・コンサルティングでサポートメンバーの下川氏と

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

超絶技巧で表現する美

室田さんの手掛ける薩摩ボタンは、鹿児島の伝統工芸品である薩摩焼「白薩摩」の技法を使い、超絶技巧でミリ単位の細やかなデザインを施している。

薩摩ボタンの歴史は、江戸時代末期にさかのぼる。外貨獲得のため海外に輸出され、討幕運動の軍資金になったともいわれている。宝飾品のようなその美しさから、海外のコレクターがこぞって収集したという。

今もそれは変わらない。鑑賞用に収集され、芸術品として飾られたり、アクセサリーとして用いられることがほとんどだ。そこで室田さんは、今回のプロジェクトで、薩摩ボタンを日常生活に「使う」ことを主眼にプロダクトづくりに取り組んだ。

「使う楽しみ」を考えたとき心に浮かんだのが、日常的に使う自動車のエンジンスタートボタンだった。私をいろんな場所に運んでくれる自動車。出発のためのエンジンスタートボタンに薩摩ボタンを使えないか―。

薩摩ボタンへの思いを語る室田さん

そんな発想から生まれた。

ポイントになる絵柄に何を選ぶか、ずっと悩んでいた。サポートメンバーの下川氏からは「超絶技巧の背景にストーリーをしっかり盛り込んだほうがいい」とアドバイスをもらった。早速行動に移し、「交通安全の神様」といわれる福岡県の宗像大社を訪れた。境内を歩き参拝し、大社の荘厳な雰囲気を感じることで、絵柄にすべき物語を頭の中で描くことができたという。

プレゼンテーションでプロダクトの説明をする室田さん

「実際に体感することで、技術面だけでなく絵柄に深みを増すことができた」と室田さんは振り返った。

完成したのは、三人の女神がほほえむ図柄や、漢字の「発」をモチーフにした花の紋様など6種類。「日常の空間が少し特別な場所になれたら」という思いを込めた。

垂水市にある室田さんのアトリエ前で

豊かな自然が発想の原点

室田さんのアトリエは、垂水市の標高約500メートルの山あいに80世帯が暮らす、自然豊かな大野原地区にある。牧場を営むご主人とともに、二人の子どもを育てながら、日々制作に取り組んでいる。

「生まれも育ちも鹿児島。一度も外に出たいと思ったことはありません」。幼いころから、野山を駆け回って土の香りや感触を感じ、虫を追いかけて草花を摘んだ。「今も変わらない地元の自然が私の創作意欲をかき立ててくれるんです。自然の色や形に勝るものはありませんから」。その自然が図柄や繊細な色となって表れる。

アトリエで制作活動に励む室田さん

細やかな技術でつくられる薩摩ボタン

緻密な作業が必要とされる薩摩ボタンは、生産する窯元が少なくなり、一時期制作が途絶えた。本格的に地元の鹿児島で復興に取り組んだのが室田さんだ。雑誌で見て初めて存在を知った。「小さなボタンの中に、宇宙が広がっている」。一気に虜になった。薩摩ボタンを制作するため、10年間勤めていた窯元から独立しアトリエを開いた。

それから10年あまり。室田さんの作品は、地元百貨店のお中元・お歳暮商戦のポスターやカタログの表紙を飾るなど、薩摩ボタンの知名度を高めている。アメリカのボタン展示会にも参加、活動の幅は広がる一方だ。

そんな室田さんにとって、今回のプロジェクト参加は、初心に戻れる刺激的な体験だった。同世代の他地域の匠やサポートメンバーとの交流を通じ、新たな着想も得た様子。プロジェクトで知り合った匠同士で、車に使うアクセサリーを作るグループを結成した。エンジンスタートボタンの実用化を狙い、商談会などに出展し、新たなビジネスチャンスをつくることを目指すという。プロジェクトで培った人脈や経験を生かすつもりだ。

「プロジェクトに参加したからこそ、薩摩ボタンの新たなジャンルに挑戦するきっかけがつかめました。私にとって新鮮で、得難い経験。絵付師のキャリアの上でも転換期になった気がします」と振り返る。

夢はますます大きくなっている。「地域に埋もれているような場所や、モノや人をデザインして作品に仕上げ、世界に発信できるような薩摩ボタンをつくりたい」。

完成した薩摩ボタンのエンジンスタートボタン

室田 志保
鹿児島県／薩摩ボタン絵付師

1975年鹿児島県生まれ。1995年白薩摩焼窯元入社。2004年鹿児島青年会議所の海外派遣事業留学生としてイタリアフィレンツェへ短期留学。2005年大隅半島の大野原にアトリエを構える。2007年に初個展。2009年日本ボタン大賞展で審査員特別賞 優秀賞を受賞。2012年「5 artistes de SATSUMA」参加。2015年アメリカボタン祭典（Manchester）で展示。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT